禅の心性観

光地英学

一

禅の心性を道元禅を中心に攻究してみたい。

仏教の心識思想として最初にあらわれたのが、仏陀証悟の縁起法、即ち十二縁起に基づいた業感縁起思想である。これは「大毘婆沙論」「倶舎論」などの所説で、業は惑から生れる。惑とは無明である。即ち無明が基因となるのが惑で、この惑から身口意三業が展開する。この業の結果、苦が現われる。更にこの苦は惑を促して業を起さしめるので、ここに惑業苦の循環が唱えられる。これを個人の三世の上にみた場合、輪廻転生思想となる。輪廻転生の主体については、第六意識論、末那識（第七識）説、阿頼耶識識（第八識）説、さらには菴摩羅識（第九識）説がある。[1] このうち八識説が最有力である。[2] 業感縁起論に次いで考えられるものに、この八識説の頼耶縁起論がある。これは「解深密経」「瑜伽論」「唯識論」などに基く法相宗の所説で、第八識、つまり阿頼耶識は、断絶虚無的なものでなく、常住不変実在的のものでもない。不連続にして連続、前後相続して前後際断、前滅後生相続不断であるとする。このように阿頼耶識は無始以来一貫相続し、永遠の未来へと前後転変し進化してゆく。その内に諸識諸法物心一切の種子を持続し、過去のすべての生にて経験した凡ゆる記憶を包蔵している。もし外縁に遇えば、種子が発現して物心の現実界を造る。換言すれば、生命自我の主体である阿頼耶識は、恒時に流転相続しつつ自我を実現し、あわせて世界を変現するとなすのである。

次に「楞伽経」や地論宗などの所説の如来蔵縁起説がある。一切の諸事象は、如来蔵から縁起しているものであるという説である。如来蔵の異名が真如であるとなすとき、真如縁起となる。真如縁起論は「起信論」などの所説である阿頼耶識が真妄和合の識であるから、絶対価値を認容し得ないと

ともに、人々各別の多元である点、真のみを主体とした心識が要求せられる。この要求に応じたものが、絶対唯一心の真如識である。真如識は無染無垢の清浄心性である。この真如識のみからすれば、この現実界の迷妄的な諸事情が説明できないこととなる。ここに真如説に不変と随縁との両面を説くこととなる。不変なる真如が妄縁に触れて発動したのが万有であるとなすので、それが真如の随縁の面である。しかしこの立場は、真如の他に妄縁というものをたてるからには、現象に真妄の和合したような要素が考えられる余地がある。従って現実に絶対価値を認め得ない。この点は真妄和合の八識説よりは進んだものではあるが、それでもなお完全でないといわねばならない。この欠点を補って余りあるものは澄観の四法界を以って代表される法界縁起論（十玄縁起論）である。[3]この思想は元来、「華厳経」を中心とする主張で、実に華厳学の根本原理である。現象界、並びに人生のことごとくが、真如である法の自現であって、真如の一大法界であるとする。真如から諸現象が現われる場合に、真如それ自体の力によって諸現象となるというのである。諸現象は千差万別であるが、それ自体、実体性、固定性がなく、時間的には因果の関係を有し、空間的には互いに因縁の関連をなし、相互に相即相入する。かくして一事一物が、他の一切事一切物と重重無尽に関連し、一即一切、一切即一、事々無碍の法界を挙しての一大縁起をなすとの主張である。この意味から法界縁起説（論）は、無尽縁起説（論）ともいわれる。

業感縁起思想に出発した仏教の心識思想は、法界縁起へと発展するに至り、宇宙万象がことごとく真如の妙体妙相妙用となった。道元禅師は、この法界縁起の立場から、高次な心識論を開陳している。「礼拝得随巻」に「艸木牆壁も正法をほどこす、天地萬法も正法をあたふるなり」という。これは無情説法ともいうべきである。[4]無情説法は南陽慧忠[5]（七七五）雲巌曇晟[6]（七八〇―八四一）洞山良价[7]（八〇七―八六九）玄沙師備[8]（八三五―九〇八）等も関説しているところである。これは一面、古代原始民族時代、自然の物物に神姿を見たもの、あるいは密教の毘盧遮那法身説法とも相通ずるものがある。無情説法を無情説法として誤りなく自心に領受するには、自己の無分別無執着が強く要請せられる。されば「相應部」二二・一〇〇に「心染せらるゝが故に衆生染せられ、心浄まるが故に衆生浄まる」[9]（南伝蔵十四・二三七）にいう如く、非情の如実相は、浄念において映現せられる。されば「聞解」（無情説法巻）に、「無情説法といへば、水の流るゝ聲、木葉の散る聲のことゝ計り、合点すれども、走で無し。今日人々、不レ落二十八界一、超二越一念念起心頭一、情識分別は無い。かうして聞くのが無情説法なり、」（註全六・五三一）という。物心両界に対して無分別無執であることを以て、無情説法を聴き得る要諦となしている。「述賛」（無情説法巻）にも「不レ落二

十八界ニ而直入ニ句中玄ニ、名為ニ無情説法ニ」（註全六・五三一）とある句中玄とは臨済の三玄中の一で、言語に拘泥しないでその玄旨を悟ることである。無情説法とは、一切諸現象の形態に執せず、その真義に徹することであるとする。真義の参徹は、主客合一の境に他ならない。この境地に入ったならば尽十方界が総て一心の開示となる。一心の一は数の意味ではなくして、絶対を意味する。一心即ち絶対心、いわゆるの心とは何か、この究明こそ、本論の主題でなくてはならない。この心について、経論は次る如く述べている。「十地経」四に「所レ言三界、此唯是心」（大正一〇・五五三a）とあり、「三界虚妄但是一心作」（大正一〇・五一四c）とある。また「六十華厳経」廿五に、「三界虚妄、但是心作」[10]（大正九・五五八c）とある。虚妄というのは、仮のもの、無常遷流のものの意であろう。また「八十華厳経」十九に「応レ観ニ法界性、一切唯心造ニ」[11]（大正一〇・一〇二b）という。「大智度論」廿九に「三界所有皆心所作」（大正廿五・二七六b）とあり、世親「唯識二十論」巻頭に、「以ニ契経説ニ三界唯心ニ」（大正卅一・七四b）とある。契経とは「十地経」（大正一〇・五五三a）のことと思われるが、「漸備一切智徳経」三にも、「其三界者、心之所レ為」[12]（大正一〇・四七六b）とある。更に智顗「法華玄義」にも「心是三界無別法、唯是一心作」（大正卅三・六九三b）という。いうところの絶対心とは宇宙心に他ならない。

宇宙心は三界を能造し、そのまま三界の相をとる。このことを示している経論の若干を更に次に掲げる。「入楞伽経」（菩提流支訳）七に「三界上下法、我説ニ皆是心ニ」（大正十六・五五四c）といい、仝九に「心見ニ於自心ニ、見ニ外種種相ニ、實無ニ可レ見法ニ（中略）三界唯是心」[13]（大正十六・五六七a）といっている。自心は三界唯心の一心と即一のものである。かかる心は「十地経」七に「心無ニ辺際ニ於ニ一切処ニ皆充足性」（大正一〇・五六三c）とある如く、無辺際にして一切処に遍満している性質のものである。かかる心を圭峯宗密は「華厳経普賢行願品疏鈔」二に、「總ニ該萬有ニ即是一心」の釈述中、「總ニ該萬有ニ即是一心者、直指ニ眞界之體ニ也」（続蔵一・一・七・五・四三三右下）といい、わが国新義真言宗の開祖覚鑁（一一〇九四一―四三）も、「真言浄菩提心私記」に「大日経」一、住心品一の「性同ニ虚空ニ即同ニ於心ニ」（大正十八・一c）に據って、「此心王是論レ體無相、猶如ニ虚空ニ」[14]（大正七九・四四a）と明示している。虚空は一切を包摂し、万有を総該する。それがそのまま一心の顕示である。即ち宇宙法界の本体に他ならない。心を大地に譬えているものをみるに、「心地観経」八に次の如くある。「衆生之心猶ニ如大地ニ。五穀五果従ニ大地ニ生。如レ是心法生ニ世出世、善悪五趣、有學無學獨覺菩薩及於如來ニ。以ニ是因縁ニ、三界唯心、心名為レ地」（大正三・三二七a）道元もこの点「盡地みな心なり」（後心不可得巻）「盡大地の心」（發無上心巻）「山河大地心」（即心是佛巻）と宣揚する。

いう如く、心の他に三界なく大地もない。心外無法三界唯

心である。[15] 実存は皆心の動きによって生ずる。心即ち識の所変である。一心と三界、大地は無別即一である。

次に禅書の場合をみる。四祖道信の牛頭法融接得時の語は、「百千妙門同歸二方寸一、恒沙功德總在二心原一」（「宗録録」九七大正四八・九四〇a）[16] であり、その牛頭法融も心を卓上している。馬祖道一も「三界唯心、森羅及萬像、一法之所レ印。」（「伝燈録」六、馬祖道一項）（馬祖道一禅師廣録 続蔵一・二・廿四・五・四〇六右上）という。黄檗希運の法嗣、羅漢宗徹は、「如何是南宗北宗」の問に答えて「心為レ宗」（「伝燈録」十二）[17] といっている。宣州安國寺玄挺についても同様にいい得る。

かかる心は自己の絶対主体であるとともに、限定された小なる心ではなく、季宙に無限に開かれている大心である。即ち

「心量廣大猶如二虛空一無レ有二邊畔一」流布本「六祖壇經」般若二）（大正四八・三五〇a）

「性含二萬法一是大、萬法盡是自姓（性）」（燉煌本「六祖壇経」（大正四八・三三九c）

「虛空無邊、心亦無邊、虛空無量、心亦無量。」[18]（「大乗五方便」北宗）

「心如二虛空一亦無二虛空之量一。」（「傳燈録」五婺州玄策之語）（大正五一・三四三c）

「諸佛與二一切衆生一、唯是一心、更無二別法一。（中略）猶如下虛空無レ有二邊際一、不レ可二測度一。唯此一心即是佛、佛與二衆生一更無二別異一。」（「傳心法要」鐘陵録）

「從佛レ至レ祖。並不レ論二別事一、唯論二一心一。」[19]（「伝心法要」宛陵録）

「我見二諸法空相一、變即有、不レ變即無。三界唯心萬法唯識（臨済録）

「龍牙和尚云、（中略）欲レ識二萬法之相一、但向二心中一契會。會二得玄理一、挙體全真、萬像森羅一法所レ印。」（「宗鏡録」九八）（大正四八・九四五c～六a）

「盡十方世界是爾心。」（「伝燈録」一〇、長沙景岑語）（全五一・二七六a）

「三界上下法、我説二皆是心一。」（「前仝」十二、道嶽偈）（全五一・二九七a）

「（前略）森羅萬象山河大地、草木叢林皆是自心中所現」（「宏智廣録」五）（続蔵一・二・廿九・四・三九八右下）

「十方法界起レ自二一心一、一心寂時諸相皆盡」（「前仝」六）（続蔵一・二・廿九・四四・四〇六右上）

いずれも自心が万法宇宙一貫の一心と即一であることを示している。いう如く自己の一心がそのまま三界唯心である。一心は個別であると共に宇宙大のものである。

かかる一心は既述の如く宇宙心と称せられ得るが、宇宙心は宇宙大のものであると共に、無実体であって、諸法の根本である。森羅万象、一切諸法、ことごとく一としてかかる宇宙大の心情ならぬものはない。一切が一心の左転右転であ

る。一心は宇宙内の諸存在を該摂する。有機質・無機質・礦物・動植物・人間等を造作し、在らしめている一切の事物の根源である。全世界は一心海中にある。ただ識のみという唯識である。われわれの心には、底知れない深さがある。表面的な顕在意識の底に、自己の意志の及ばない自由にならない心がある。即ち各個人の意識の奥に、個人的無意識がある。その奥に普遍的無意識がある。この普遍的無意識は、一切に普遍している。[21] これが宇宙の一心である。一心海中の渦（うず）が物質に他ならない。[22] のみならず、われわれの感覚器官の働きも、一心の上の生起である。すべてが一心に摂帰し、一心上の諸波であるといい得る。一心は一切の根本存在であるから、「いはゆる正傳しきたれ心といふは、一心一切法、一切法一心なり」（即心是佛巻）といわねばならない。「後心不可得巻」に「十地経」四現前地所説の三界唯心思想（大正一〇・五五三a）をも承けて、「いはゆる佛道に心をならふには、萬法即心なり。三界唯心なり。唯心これ唯心なるべし」「三界唯心なり、唯心これ唯心」という。三界は空間的存在に止まらず、時間的存在もことごとくを包摂する。「内外中間、初中後際、みな三界なり」（三界唯心巻）である。三界と心について「三界唯心巻」に「三界は全界なり、三界はすなはち心といふにあらず」と断言している。三界と心とは、主従表裏の関係ではなく、即一のものであることの謂である。このことを更に「萬法にあらぬ唯心はなく、唯心にあらぬ萬法はなし」（佛向上事巻）という。一切は心であるから、唯心でない一物も存しない。「私記」（「後心不可得巻」釈述）は、「心のほか一法なきがゆゑに、唯心これ唯心なるなり。」（註全一・五二三）と釈している。「いはゆる佛道には盡地みな心なり」（後心不可得巻）「萬法即心なり、三界唯心なり」（心不可得巻）「三界ただ心の大隔なり」[23]（行佛威儀巻）とあるのも同轍である。ことごとく一心の蓋天蓋地である。「佛教巻」に「一心のほかに佛教ありといふ、なんぢが一心いまだ一心ならず、佛教のほかに一心ありといふなんぢが佛教いまだ佛教ならざらん」といって、一心と仏教を即一であることを述べている。一心は単に仏教のみに止まらない、一心は一切を究尽する。心の一法究尽の前には、十方虚空一切消殞して片影も留めない。かかる一心即ち宇宙的絶対心を、道元は次の如く種々と表示し説破している。

「心とは山河大地なり、日月星辰なり」）即心是佛巻）
「しばらく山河大地、日月星辰これ心なり」（身心学道巻）
「一切諸法萬象森羅、ともに、ただこれ一心にして、こめずかねざることなし。このもろもろの法門、みな平等一心なり」[24]（弁道話巻）

即ち一心法界、心外無別法、万有総該心の表示である。同一意義にて、禅師は尽界を以て華の心とし、心華とし、梅華

となす。「梅華巻」に「盡界は心地なり、盡界は華情なり。盡界華情なるゆゑに、盡界は梅華なり。盡界梅華なるがゆゑに、盡界は瞿曇の眼睛なり」という。世界を以て皆、梅華となす。盡界は華の心であり、心華であり、一心であり、如来眼睛である。一心一切法であり、一華多華である。

一心はまた鉢盂である。「鉢盂巻」に「鉢盂は但以二衆法一合二成鉢盂一なり。但以二鉢盂一合二成衆法一なり。但以二渾心一合一成鉢盂一なり。但以二虚空一合二成鉢盂一なり。但以二鉢盂一合二成鉢盂一なり」という。鉢盂は仏心を以て合成したものであるから、仏心即鉢盂としての鉢盂である。換言すれば、虚空を以て鉢盂を合成したものである。この虚空は仏心を換言したものであり、一切存在の基本である。鉢盂はそのまま虚空であり、仏心であり、一心である。一心は鏡とも表現され得る。「古鏡巻」に南嶽鋳像の話を挙げ、それを評釈して、「いまこの萬像は、なにものとあきらめざるに、たづぬれば鏡を鐵成せる證明、すなはち師の道にあり」とする。鏡とは心のそれである。一切諸法の万像は、ことごとく心鏡を以て鋳成したことの証明が、南嶽鋳像の話にあるのを知らねばならない。同「古鏡巻」に「第十七祖僧伽難提と第十八祖伽耶舎多との問答に因んで、「諸佛は、大圓鑑の鐵像なり、大圓鏡は、智にあらず理にあらず、性にあらず相にあらず」とある。諸仏はすべてこの円鑑と離れてはいない。三世十方の諸仏も等しくこの円鑑の降生である。円鑑が諸仏と形を変えて鋳像されたのである。と共に、円鑑は智にして智を超え、理にして理を超えたものである。実に性と相とを容融し性相を離れたものである。性とは法の自体であり本体であって、内在して不変易のものとされる。これに対して相とは相貌形体であるから、具体面であり変易に属するものである。あるいはこれを無為と有為とに分つこともある。大圓鑑は有為無為両相を離れた、相対双非の存在である。いう如く宇宙大のものであると共に、また各自の自心であり、自性清浄心それ自体である。内外共に圓鑑ならぬはない。心鏡は心月ともいい換えられ得る。「都機巻」に盤山寶積の示衆に対して評釈し、一切存在を以て心となし、万像悉皆、心月であることを闡明しているのがそれである。一心はまた一顆明珠である。「一顆明珠巻」に「しかあれはすなわちこの明珠の有如無始は無端なり。盡十方世界一顆明珠なり。（中略）圓陀陀地なり。轉轆轆なり」とある。[25] その「圓陀陀地なり。轉轆轆なり」とは、上述の如き諸現象の一顆明珠としての円満な特質の発揮をいう。このことを「御抄」（一顆明珠巻）にも、「圓陀々地とは、圓ろくかどなき心也。無始無終、或道環なむと云心地也。轉轆々と云も、ろくろしが物を引く時轉ずる姿歟。いづくをはじめ、いづくを終と云事もなく、無際限詞也」（註全一・二七九）という。一心はまた空華でもある。「空華巻」に「涅槃生死是空

華、（中略）この涅槃生死は、その法なりといへどもこれ空華なり」という。かの張拙秀才の投機偈の一節、「涅槃生死是空華」（「聯燈會要」廿二（続蔵一・二・乙九・五・三九七左上））の一句を以て、宇宙即一心の全現成となしているのに他ならない。[26] 一心はこれのみに限定せられない。「牆壁瓦礫、石頭大小、これ心なり」と「三十七品菩提分法巻」にいっている如く、静的な自然物もすべて宇宙心の現われに他ならない。これは青原行思（七四〇）が、「草木有二佛性一者、皆是一心」（「宗鏡録」九七（大正四八・九四〇c））といっているのと軌を一にするものである。さればまた「後心不可得巻」にも、「おほよそ牆壁瓦礫にてある佛心あり。三世諸佛、ともにこれを不可得にてありと證す。（中略）いはんや山河大地にてある、不可得のみづからにてあるあり。艸木風水なる不可得の、すなはち心なるあり」[27] と示される所以である。限定できないのが宇宙心の不可得性である。限定できないから、一切を包摂する。一切を包擁するから種種の名称を以て説示し得る。ことごとくは一心の異称であることに変りはない。一心は具体的なものに止まらず、抽象的なものをも摂収している。「三界唯心巻」に「青黄赤白これ心なり、長短方圓これ心なり、生死去来これ心なり。年月日時これ心なり。（中略）春華秋月これ心なり」とある。われわれお互いの生死の相そのものが、そしてまた四季変化とともに彩る自然現象そのままが、絶対心の自己開示である。水は行く行く常住、花は散る散る無為である。

それではかかる宇宙心と自己の一心とは如何。この点、如上概ね叙述したところであるが、なお更に一考してみたい。黄檗希運は「山河大地、日月星辰、總不レ出二汝心一。三千世界、都來是汝箇自己。」（「傳心法要」宛陵録）「盡十方虚空界、元來是一心體」（前仝）という。宇宙心は自己心とは別異のものではなくして、同質である。蓋し自己・侘己、万法一貫のものが一心であるからである。

なお自己一心の性格について、「説心説性」「三界唯心」「古佛心」「菩提心」「無上心」「法性」等、眼蔵諸巻に説破していることも看過さるべきではない。いうまでもなくかかる「心」は質多 citta ではなく紇栗陀耶（フリダヤ） hridaya である。[28] 一切の事物の根源としての絶対心に他ならない。道元禅師にてはこのような心の表現も上掲に止まらず、なお仏心・古仏心・古心・仏古・円鑑・大円鑑・明鏡・宝鏡等多彩である。

（1） 地論宗では阿頼耶識を浄識としているのに対し、攝論宗では第八識の上に、第九識を立て、それを浄識としている。

（2） 保坂玉泉「唯識根本教理」四四頁～五頁。

（3） 法蔵（六四三―七一二）は「探玄記」に、諸種の縁起説を総括して、次の三種の法界縁起と為している。染法縁起・浄法縁起・染浄合説。（「仏教の根本真理」、坂本幸男〈法界縁起の歴史的形成〉八九二頁参照）

（4） チャーンドギャ・ウパニシャッドには、鳥獣が人の為に梵

神の深義を説き、火も亦人の為に梵神の何たるかを示すと説いている。（忽滑谷快天「禅学思想史」巻上・五一頁）

(5) 南陽張濆行者への答（「伝燈録」五、）（大正五一・二四四b～c）（「祖堂集」三、慧忠国師項）

(6)・(7) 「伝燈録」十五（大正五一・三二一c）

(8) 上堂、聞二燕子叫一云、深談二實相一普請二法要一、便下座。（「玄沙師備禅師廣録」巻下」）（続蔵一・二・卅一・三・一九四左上）

(9) なお「雑阿含経」一〇に「心悩故衆生悩、心浄故衆生浄」（大正二・六九c）（舟橋一哉「原始仏教思想の研究」廿二頁註に記載）

(10) 「八十華厳経」卅七には、「三界所有唯是一心、如来於レ此分別、演三説十二有支皆依二一心一」（大正一〇・一九四a）

(11) 「六十華厳経」一〇には心如二工畫師一畫二種種五陰一、一切世界中、無二法而不レ造。（大正九・四六五c）

(12) 「駒大仏教学研究紀要」卅二号、川田熊太郎〈仏教の唯心説について〉に記載。

(13) なお「法界即是一切衆生心界」（「不退転法論経」（大正九・二三〇b）「三界所有皆心所作」（「大智度論」廿九（大正廿五・二七六b））

(14) 永明延寿「宗鏡録」廿九に、「諸教中皆説二萬法一心、而浅深有レ異（大正四八・五八四b）」

(15) 「林間録」上に元暁が夜塚間に宿し渇の余り穴中の水を飲んだところ、甘露の味がした。翌朝これを視ると髑髏の中の水であった。為に嘔き出さんとしたが、猛省し、嘆じていうようには、「心生則種種法生、心滅則髑髏不二。如来大師曰、三界唯心。豈欺レ我哉」（続蔵一・二九・廿一・四・二九五左上）この場合の三界唯心の心は、宇宙の一心でなくして、自心のことであり、主体の自心によって、客体を変じ造作する意であると思われる。しかしこの自心も宇宙の一心と無関係ではない。

(16) 問、何者為レ宗。答、心為レ宗。問、何者為レ本。答、心為レ本。（「宗録録」九七（大正四八・九四一a））

(17) 「有二檀越一問、和尚是南宗北宗。答、我非二南募北宗一、心為レ宗。又問、和尚曾看レ教不。答云、我不二曾看一教、若識レ心、一切教看竟。（「宗鏡録」九十八）（大正四八・九四四b）

(18) 宇井伯寿「禅宗史研究」一・四九八～九頁

(19) なお同「宛陵録」に此一心法體、盡二虚空一遍二法界一、名為二諸佛一。」

(20) なお「盡十方世界是沙門眼、盡十方世界是沙門全身、盡十方世界是自己光明、盡十方世界自己光明裏、盡十方世界無三一人不二是自己一。」（「伝燈録」一〇、長沙景岑上堂語）（大正五一・二七四a）

(21) 河合隼雄「ユング心理学入門」九四頁。

(22) 橋本健「超物理学入門」一五四頁にこの点を指摘。

(23) これは三界唯心という意味である。なお「仏祖歴代通載」十四、馬祖道一の項に、三界唯心について、「三界唯心、森羅及萬像一法之所レ印」（大正四九・六〇八c）とある。

(24) なお宇宙心について、次のものにも説述されている。「佛教巻」（全集本一五七頁下）「發無上心巻」（全三五三頁下）

(25) 「眼晴巻」に天童如浄師の「大地山河露二眼晴一」とあるのも、一顆明珠と同一趣意であると思われる。

(26) 岡田宜法「正法眼蔵思想大系」一・三五一頁。

(27) 「仏教巻」にも「上乗一心は、土石砂礫なり。土石砂礫は一心なるがゆゑに、土石砂礫は、土石砂礫なり」とあり、

「辨道話」に「草木牆壁は、よく凡聖含霊のために宣揚し」とある。

(28) 質多者天竺音、此方言レ心。即慮知之心也。天竺又稱二汚栗駄一、此方稱二是草木之心一也。又稱二矣栗駄一、此方是積聚精要者為レ心也。(「摩訶止観」一上(大正四六・四a))

二

多彩な異名を有する自己の一心の清浄性について、委細に渉るならば諸類型のあることが考えられるが、そのことは一応ここに割愛する。概していうならば、般若・華厳・如来蔵・密教等大乗の諸経論は、心性本浄説を主張しているとなし得る。しかも、その源流は原始仏教、法蔵部などの如き上座部系の部派(2)などに見出され得る。のみならず大衆部系統の所説も、自性清浄思想である。次にそれら経論の若干を示してみる。

「この心は極光浄なり、而して其は客の随煩悩に雑染せられたり」(「増支部経典」一集・五)(南伝十七・十四)

「是心非レ心、心相常浄故」(「摩訶般若波羅蜜経」三)(大正八・二三三c)

「観二一切法自性清浄一。不レ染二諸煩悩塵垢一、猶若二蓮華一」(「十一面観自在菩薩密言念誦儀軌経」巻中)(大正蔵廿・一四三b～c)

「本性清浄」(「大日経」一)(大正十八・一c)

「一切衆生心本性、清浄無穢如二虚空一。(中略)如二其心性本浄者一、一切衆生應二解脱一。」(「大方等大集経」十三)(大正十三・九〇b)

「一切有性本性皆浄」(「大般若経」五六九)(大正七・九三七a)

「如来蔵自性清浄」(「入楞伽経」三)(大正十六・五二九b)

「心性本清浄、猶若二浄虚空一」(「大乗入楞伽経」六)(大正十六・六二六c)

「心性極清浄」(須摩提女経)(大正二・八四一c)

「此心本性清浄」(「金剛頂瑜伽中略出念誦経」二)(大正十八・二三七b)

「如来蔵者、(中略)自性清浄蔵」(「勝鬘経」自性清浄章)(大正十二・二二一b)

「心相本性清浄」(「大集経」十一)(大正十三・六八a)

「心性本浄如二虚空一」(「大乗理趣六波羅蜜多経」一)(大正八・八六八a)

「心本清浄、客塵煩悩所二汚染一相故不二清浄一」(「大毘婆沙論」廿七)(大正廿七・一四〇b)

「(前略)自心浄亦爾、唯離二客塵一故。(中略)心性本浄」(「大乗荘厳経論」六)(大正卅一・六二二c～三a)

「以二其心性本来清浄、無明力一故、染心相現」(実叉難陀訳「大乗起信論」巻上)(大正卅二・五八六a)

「若一切法随二順此性一、則名為レ内。是正非レ邪、即為二清浄一。(中略)故言二自性清浄蔵一」「仏性論」二)(大正卅一・七九六b)

「心性清浄、為二客塵一染」(「舎利弗阿毘曇論」廿七)(大正廿八・六九七b)

「心性本浄客随煩悩之所二雑染一」(異部宗輪論)(大正四九・一五c)

「諸識自性非レ染、由二世尊説一一切心性本清浄一故」(「瑜伽師地論」五四)(大正卅・五九五c)

「心体非二煩悩一故、名二性本浄一」(3)(「成唯識論」二)(大正卅一・九a)

「衆生心性本浄」(随相論)(大正卅二・一六三b)

同じく一心の清浄性を禅書は次の如く示している。

「心性本來来清浄之処、染著」(「楞伽師資記」序)(大正八五・一二八三a)

「自心本來清清淨」（最上乘論）（大正四八・三七七b）

「菩提自性本來清淨」[4]（流布本「六祖壇経」行由一）（大正四八・三四七c）

「自性本來清淨湛然空寂」[5]（「頓悟入道要門論」）（続蔵一・二・十五・五・四二一右上）

「達磨西來唯傳二心印一。故自云、我法以レ心傳レ心、不レ立二文字一。此心是一切衆生清淨本覺。」（宗密「禅門師資承襲図」）（続蔵一・二・十五・五・左上）

「此性本來清淨具二足萬德一」（「古尊宿語録」卅五、大随開山神照禅師語録）（続蔵一・二・廿三・四・三〇八左下）

「人人脚跟下本有二此段大光明一。虚徹靈通、謂二之本地風光一。生佛未レ具、圓融無際。在二自己方寸中一、為二四大五蘊之主一。初無二汚染一本性凝寂。」（「圜悟心要」上、示二胡尚書悟性一勸善文）（続蔵一・二・廿五・四・三七〇左下）

「到二一念不生處一、徹二透淵源一、修然自得。體若二虚空一、莫レ窮二邊量一。亘レ古亘レ今、萬象籠羅不レ住、凡聖拘礙不レ得、淨倮倮赤灑灑。謂レ之本來面目本地風光。」（「前仝」下、示二張仲友宣教一）（仝三七四右下）

「心性無染、本自圓成」（高麗國普照禅師修心訣）（大正四八・一〇〇六a）

心性の本質はいう如く清淨である。本来清淨でなければ成仏の可能性は閉される。心性本淨こそは一切衆生成仏の基盤である。心性本淨思想が阿摩羅識、なかんずく本覚・本証思想の名において強調せられる基因をなしている。それでは形相については如何。心性そのものでないが、心性と相即する日常心は時間的にいって、過現未を通じ無常性を帯びている。「摩訶衍寶厳経」はこの点、次の如く示している。

「若過去者去心以滅、若未来者来心未レ知、若現在者現心不レ住。（中略）不レ在レ内亦不レ在レ外。亦不レ在二両中間一、心者非レ色不レ可レ見、亦無レ対無レ見無レ知無レ住無二餘倚一。」（大正十二・一九七c）

いう如く日常心は、時間上無常遷流であって不可得そのものである。「心不二自知一レ心、心不二自見一レ心」（三巻本「般舟三昧経」上、行品二大正十三・九〇六a）「心者不レ知レ心、有レ心不レ見レ心」（「前仝」上行品仝十三・九〇六a）心性は不可得である。心性の不可得性について、更に教典は次の如く示している。

「心不レ在レ内、不レ在レ外、及兩中間、心不可得」（大日経）（大正十八・一c）

「此心空無レ有レ主、無レ名無二名行一、無二相貌一。不二從レ縁生一、不下從二非縁一生上、亦非二自生一」（南岳慧思「諸法無諍三昧法門」）（大正四六・六三六c）

「心畢竟不可得、心如二夢幻一不レ實」（智顗「法華三昧懺儀」）（大正四六・九五四a）

「心識之法、既無二形質一」（仝「覚意三昧」具名、釈摩訶般若波羅蜜経覚意三昧）（大正四六・六二三a）

「萬法唯心、心亦不可得」（「伝心法要」鋑陵録）

いう如くわれわれの心性も不可得であるが、諸法も無自性である。（「六十華厳経」卅・大正九・五九四c「中論」一大正卅・二b）これらの背景基盤をなす絶対心も、何れも虚空の如く、無形無相無自性であって不可得である。心性・絶対心、即ち真実心は、無底の深淵であるから対象化されない。最も主体的主体である。

絶対心は肉体の有限相に限定されるものではなく、無形にして無態、一切を包擁し、無限への拡がりを持ち、科学的認識の外にある。一心は対象化できないし、姿相の上にも示し得ない。そのことについては、次に説く如くである。

「心性本浄如二虚空一」（「大乗理趣六波羅蜜多経」一）（大正八・八六八a）
「若知二法無一実、是心亦復空」（「大智度論」八）（大正廿五・一一八a）
「心無二形相一、性不可得、云何可レ制、了レ心非レ心」（「釈禅波羅蜜次第法門」三上）（大正四六・四九二b）
「（前略）亦名二自性清浄心一、是名二真実心一。不レ在レ内、不レ在レ外、不レ在二中間一。不断不常、亦非二中道一。無レ名無レ字、無二相貌一、無レ自無レ他、無レ生無レ滅、無レ来無レ去、無二住処一。」（慧思「諸法無諍三昧法門」上）（大正四六・六二八a）
「夫心識無形、不レ可レ見」（「摩訶止観」二上）（大正四六・十五b）
「識無レ刑（形）」（「楞伽師資記」道信章）（大正八五・一二八七a）
「若自了了知二心不レ住二一切処一即名二了了見二本心一也」（頓悟入道要門論）（続蔵一・二・十五・五・四二二左上）
「心法無形、通二貫十方一」（臨済録）

もし自心を具体的に顕示でき得るならば、それは最早、無限なものではなくして、有限の域に止まるものであるといわねばならない。取り出して示しようのないのが心である。それは宇宙大のものである。かかる宇宙心は、また自己の一心でもある。

絶対心は空間的には大小有無すべてを包摂して余りなく、時間的には光の速度よりも速い。動静二相いずれも絶対心の顕現である。それは心そのものが無自性空不可得であるからである。鈴木大拙編「校刊少室逸書」第一編に、心の広大無辺不可得性を次の如く種々説述している。

「心如二虚空一不レ可二破壊一、故名二金剛心一。心不レ住レ住、不レ住二不住一、名二波若心一。心性廣大、運用無レ方、故名二摩訶衍心一。心體開通、無レ鄣無レ碍、故名二菩提心一。心無二崖畔一、亦無二方所一。心無レ相、故非二有邊一、（中略）故非二無邊一、非二有際一、非二無際一、名為二実際心一。（中略）心非二内外中間一、亦不レ在二諸方一。心無二住處一、是法住處、法界住處、亦名二法界心一。心性非レ有非レ無、古今不レ改、故名二法性心一。心無レ生無レ滅、名二涅槃心一。」（廿八～九頁）
「（前略）心無二自性一故、是以経云、一切法無レ性故、一念起時、即不レ生不滅。（後略）」（卅五頁）
「心無レ性故、非二是有一、従レ縁生故非二是無一。心無二形相一故非レ有、用而不レ廃故非レ無」（卅六～七頁）

石頭希遷もこの点、潮州大顛（七三二―八二四）に対し、「眞物不可得、汝心見量意旨如レ此也」（「伝燈録」十四）といっている。「楞伽師資記」や傳大士「心王銘」[7]黄檗「宛陵録」[8]に心性の空寂なることを宣示し、寶誌が心体の無形[9]をいっているのも、要するに心性の無自性無限定性の謂に他ならない。いう如く不可得とは限定を超えた無限定を意味する。心が無自性不可得、広大無辺で際涯を絶している。方円・大小・色相もない。時間的にも「過去心不可得・現在心不可得・未來心不可得」

（「金剛般若波羅蜜経」）（大正八・七五一b）三世十方に通貫し、目前に現示する。一切の相を超えたものであるから、心の実体は知覚認識の外にある。その点、見得ない電気と如同する。「往生要集」下七・念仏利益に「『大集経』（巻卅八意）日蔵分云『（中略）心不レ見レ心、心不レ知レ心」とあるのも、この間の消息を要言したものである。心を知るものそれ自体も心である。本心そのものは対象を絶している。我我の知識の限界を超えている。無限に自己の中に自己を探究し得る。しかしこのような行き方である限り、本心の把捉は永久に不可能である。本来空無限であり、無相のものであるから、時に妙有有限の相ともなる。[10] 真空である心が折に触れて有としてそれ自らを現わにすることがある。鈴木大拙編「少室逸書」第一編一はこの点「心性廣大、運用レ方」（廿八頁）ともいっている。しかしそれは心の有であることを意味したものではない。蓋し無自性不可得霊妙性によるといわねばならない。心が菩提にも向い、煩悩の生起を現ずるのも、心の本来不可得性によっている。「傘松道詠」にも、この消息を「心とて人に見すべき色ぞなき、たゞ露霜のむすぶのみして」という。禅師は「辨道話」や「佛性巻」等にて先尼外道の心常住思想を破斥する。もし一心が実体あり、心常住ならば、一切の変化消滅を解釈することはできない。故に心無常と観ずる外はない。「辨註」（佛性巻）に「無性とは、佛法無性なり、諸佛無性なり、衆生無性なり。一切諸法、無レ不二無常無性一」（註全三・一五三頁）とあるように、衆生は無常にして無性である。心無常は心無性でなくてはならない。この無自性無常であるところに、心不可得の思想が重視される。「心不可得巻」に、「佛祖の入室よりこのかた、心不可得を会取す。いまだ佛祖の入室あらざれば、心不可得の問取なし」とあって、仏祖道に帰依してはじめてよく心不可得の理が会取される。この不可得とは「三十七品菩提分法巻」に、四念処の第三心念処について心を説いて、「離二四句一、絶二百非一」であるといっている。四句とは有空の範疇を以て諸現象を批判検討するもので、第一句は有門、第二句は空門、第三句は亦有亦空門、第四句は非有非空門で、前二句を両単と名づけ、後二句を雙照雙非と呼ぶ。いうところの百非とは、あらゆる否定の大数を抽象した語で、非有非無、非有為非無無為等、いやしくも否定思想を表現するすべてを用い、不可思議不可説なる深義を表明しようとする。心は本来、その四句も百非をも超越した不可得空性のものである。[11] 不可得空はそのまま心である。この超越的内在心である自己の本心は、即ち内在的超越後である宇宙心と一体である。宇宙心が具体化して牆壁瓦礫、三世諸仏、山河大地、草木風水ともなる。これらことごとくが宇宙の一心の顕現であり、ともにみな一多相即の宇宙的不可得心そのものである。

一心は単に空間的に自己、万法を一貫する一面に止まらない。時間的にも通貫する。われわれの生死も、一心の自己開示である。[12] 単に人間生死に限定せられない。「古佛心巻」にも「まことに七佛以前に古佛心壁竪す。七佛以後に古佛心才生す。」という。古佛心即ち一心は、前後無窮である。無限の過去より永遠の未来に、無始無終一貫のものである。いう如く一心は空間的に遍在すると共に、時間的に三世古今に通貫する。一心は時空を荷負って而今に現成公案する。諸法そのままに実相として現成する。

これは絶対心の汎神論的一元思想の表明であるといい得る。道元のかかる思想は、単なる哲学的思想として関説されたものではない。この絶対心が人格的に写像されるところに、禅師の意図するところがあるとなし得る。この意味にて「三界唯心巻」に、「このゆゑにいま如来道の三界唯心は、全如来の全現成なり」といって、佛道の意味する三界唯心は、宇宙を以て全如来のすがたであるとみる。絶対心を以て単なる思想としないで、如来の人格的体現とする。いう如く、人格性を胚胎しているのが一心でなければならない。ここに一心は豊かな宗教性をおびてくるものとなし得る。

絶対心は単に法身仏として、自己阻外のものたらしめてはならない。自己即仏として自らに親しく体認さるべきものである。いま一応眼を禅以外に転ずるに、原始仏教の根本立脚地は、凡てをわが心において解決せんとした点にあった。[13] その心は必ずしもここにいう絶対心という如き高次のもののみを意味してはいない。しかし自性の一心に一切を摂帰するところは注意せられねばならない。禅以外にても、天台が一念三千の観解、一心三観の理を高揚しているなどは、深甚な教相を以て、己が一心の上に摂入することを説述したものに他ならない。[14]「絶観論」は、心を法心・金剛心・摩訶衍心・菩提心・実際心・真如心・法界心・法性心・涅槃心ともいっている。何れも一心の別称に他ならない。

「浄慧法眼禅師宗門十規論」に、「須彌至大、藏歸二芥之中一。故非二聖量使一然。眞猷合爾。又非二神通變現、誕生推稱一、不二著一レ它求一、盡由二心造一。」（続蔵一・二・十五・五・四四〇右下）という。須彌山の極大を一芥の極小のうちに観じ得ることも、神通変現の至妙性も、要は己が唯心の造作であるといわねばならない。かかる心を保任しているのが、お互いの心の本来性である。本来の面目としての一心を、石頭希遷（七〇〇―七九〇）は「参同契」に竺土大仙心といい、洞山良价は「寶鏡三昧」に如是法といい、高麗の普照は霊知心[15]といっている。道元禅師また、この点幾多の思想を表明している。「古鏡巻」に六祖壁書の偈を縁として、一心の明鏡であることの功夫を促がし、太宗帝の人鏡説の徹底を期し、「人を鏡とすといふは、鏡を鏡とするなり。自己を鏡とするなり」という。自己を以て鏡であることを自

覚する。本来鏡である自己が、真の自己となることの謂である。また「恁麽巻」にて、恁麽事を、雲居示衆の恁麽事、六祖の仁者心動、及び伝法伝衣、什麽物恁麽來、且つはまた薬山の恁麽不恁麽について評釈している。この恁麽の意義について「聞解」（恁麽巻）は、「恁麽は俗語の如是なり。如是は法理を指す稱、今は自心の法体を指す」（註全四・二八五）という。いう如く、恁麽は自心の本質であることの提示であるとなし得る。「仏教巻」に十二因縁を以て一心とし、一心の十二状態となしている。これはかの「十地経」四に「所レ言三界此唯是心。如來於二此分別一演二説十二有支一、皆依二一心一如レ是而立」（大正一〇・五五三a）といい、同五に「了二達三界唯是心一、十二有支依レ心有」（大正一〇・五五五a）といっているものなどを承けたものと思われる。自心と宇宙心との即一観に立った一心は、説即性の説心説性であるとともに、赤心、真我、屋裡の主人公、無位の真人である。この真人は、迷悟凡聖を超越し、無相無依である。自他一如裡各自の認得を要請する。

各自、真実真人であることの自覚内容を省慮するに、仏心と同一のものであるという自信は、仏祖の心の伝燈承受であることの宗教感情によって温められ、いよいよその自覚が鞏固となってくる。「法性巻」に「生知を習学するなり。無師智自然智にあふて、無師智自然智を正傳するなり」という。生得の純粋智については、本来具有のその生智を習学し、師より得られる智でない本来性としての智を正伝する。このような生得の純粋智（生智）は、皆同一阿耨菩提である。かかる境涯を得た人は、これを後代に正伝し流布するであろう。このところを「聞解」（決性巻）には「仏の無師智自然智を説くを聞いて、人々の無師智自然智を正伝する、吾無師智を吾自然智で正伝し、自心より自心に伝ふるなり。釋迦の心は汝が心なり、別心は無い。師と云ふも心のこと、心外無法に気をつけてみよ」（註全六・六〇七）といっている。自己本来の生知は釈尊正伝の仏智と別異ではなく、即一のものである。

禅は深い哲学思想を基盤とし、その背景となしている。しかし禅そのものは決して単なる思想体系ではない。現実即今自己の上に究明され、人格の上に親しく燃焼さるべきものである。一切の思想教説も、自己の修道と無関係のものであってはならない。ここに深遠な哲学思想を包懐している反面に、深い宗教性を胚胎する禅の本質生命があるといい得る。上述した一心の問題についても、また同一見地から攻究し得る。達摩大師は安心といい、僧璨は「信心銘」に信心といい、道信は「楞伽經」により諸仏心第一という。また「宗鏡録」九七に弘忍の言として、「唯有二一乘法一、一乘者一心是」（大正四八・九四〇a）といっている。一乘の法とは一心であるという。いうところの心の参究こそ禅の関心事でなければならない。一心は自己に内在するものであるとともに、超越的のものであ

る。超越しているとともに自己に内在する。宏智はこの点「自反在二於心中一、若三大海之一漚一耳」（「宏智廣録」五 続蔵一・二・三九八右下 廿九・四・）といっている。一心は自己を包んでいるとともに、自己に内在しているものであり、更に自己そのものである。それは一心を内容基盤とする自己が、無限的な内的領域を有しているものであることを意味する。すべては自己のうちに生かされねばならない。禅の意味するものも、この一心を本具のものとして親しく体認するところにある。「大日経」一、住心品にも「云何菩提、謂三如レ實知二自心一」（大正十八・一c）と明示している。玄沙師備が「夫出家人識心達三本源一故號為三沙門一」（「玄沙師備禅師廣録」下 続蔵一・二・卅一・二・一九七左下）といっているのも、局視的に同軌の思想であるとなし得る。道元禅師の真意は、教家等の諸説を摂取し、自己の修道裡、直下に志向せしめようとする。よし如来であっても、自己究明に無関係なものは何等の価値もなく、畢竟、無縁の閑家具である。それを以て自己の修道上に志向せしめる。宇宙的如来全身として価値づけられた絶対心を、主体的に身修体認せんとするのである。絶対心の自証である。ここに哲学と異る宗教的意義を最も端的に体現する道元禅の面目がある。道元の包懐する思想は極めて高遠であるが、それは要するに自心を親しく体認するところに、その真意義があることを忘れてはならない。この意味にて、一見単なる思想的表現にみられる場合でも、その意味する本義や目的は、自己の上に、自心の上に、親しく探求せんとする所にある。三界唯心と称せられている絶対心も、自心と無関係なものではない。このことはあなて道元禅の特質ではなくして、広く仏教、殊に禅の関心を払って己まないところでもある。馬祖が百丈の鼻頭を扭ったのも、客観界のみに野鴨子を見て、廻向返照しないことを自省せしめんとした、この間の一消息といい得る。道元の意図するところも、絶対心を最も直截、積極且つ実践的に識得せんとするにある。

自心の体現は、小なる自心の体認ではない。客観界ものみそをことごとく自心のうちに包摂する。主客一体の徧参である。自心が尽十方界に全一となることである。この点、哲学・道徳・芸術などの根本母胎の味到となし得る。縁起と実相の妙旨を、無碍に体取する根本主体の確立に他ならない。すべて自己のうちに生かされねばならない。このようにいったからとて、本来自己に無いものを、万法との一如によって、外部から摂取することではない。万法と同一心である自己本来具有の堅実心を、体認することの謂である。

（1）「印仏研」十九号、勝又俊教〈心性説の類型的考察〉参照。如来蔵の本質は、自性清浄心である。（「印仏研」卅七号、西義雄〈如来蔵思想の淵源に就いて〉）「阿闍世王経」には全篇にわたって心性本浄が説かれている。（「印仏研」卅六号、平

川彰〈大乗仏教の興起と文殊菩薩〉）自性清浄心を基として唯識説をなしているのは、「大乗荘厳経論」「中邊分別論」である。（宇井伯壽「印度大乗仏教中心思想史」一五七頁）心性本浄客塵煩悩説を主張したのは、「舎利弗阿毘曇論」廿七（大正廿八・六九七b）でこれを承けたのが、「異部宗輪論」（大正四九・十五c～十六a）一説部、説出世部、鶏胤部、分別論者等であったと思われる。（「浄土教の思想と文化」香川孝雄〈勝鬘教における煩悩説の成立〉一〇五〇頁なお「龍大論叢」三三七号、加藤仏眼〈現生不退の論理構成〉昭和十四年五・六月号「仏教研究」月輪賢隆〈仏教に於ける無我の大我の思想〉）「異部宗輪論」（大正四九・十五c）に説出世部・鶏胤部・一説部・大衆部を心浄の主張者として挙げている。（「印仏研」四二号、神谷正義〈如来蔵思想の成立背景について〉に指摘）自性清浄と並んで後には、自性明浄の語を大乗経典にて用いている。（高崎直道「如来教思想の形成」七五五頁）しかし、原始経典には必ずしも心性本浄とするもののみではなく、他に染浄和合の心を示すもの、あるいは種々心を表わすものなどがある。（昭和十六年三・四・五月号「佛教研究」西義雄〈原始経典に於ける「心性本浄に就いて〉）

（2）大乗仏教の本浄説は清浄な心性として考えられていたのに対し、原始仏教や上座部系のものは、現象として生滅変化する心相が、清浄であると考えられていた。（「印仏研」四〇号、水野弘元〈心性本浄の意味〉）

（3）これら経論については水野弘元「パリ仏教を中心とした仏教の心識論」四「印仏研」四〇号、水野〈心性本浄の意味〉などの記載参照。

（4）なお同「壇経」行由一に、「自性本自清浄」（大正四八・三四九a）坐禅五に、「人性本浄、由二妄念一故蓋二覆真如一。但無二妄想一性自清浄。」（全四八・三五三b）

（5）「頓悟要門論」諸方門人参問語録下にも「心性本来清浄」（続蔵一・二・十五・五・四二八左上）とある。

（6）道信章に、「神道清利、心地明浄、観察不明、内外空浄、即心性空滅。如二其寂滅一、則聖心顕矣。」（大正八五・一二八九a）

（7）心性雖レ空貪瞋體實（「伝燈録」卅）

（8）如来蔵、本自空寂。

（9）心體無レ形争レ段。（「誌公和尚十四科頌」生死不二（「伝燈録」廿九）なお「第五祖提多迦尊者曰、（中略）即心不生滅故、即是常道、諸仏亦常、心無二形相一、其体亦然。」（「伝光録」第五章、提多迦章、本則）なお講座「禅」七、西谷啓治〈空における安心の問題〉三〇〇頁は、心不可得について、「もとめる心ともとめられる心とが相忘じて、もともと把捉すべからざる当の真心が根源から現前してくることであろう」と記述している。

（10）鈴木大拙博士は「空は印度傳來的で、心は支那化の空であるともいへる」（春秋社発行「鈴木大拙選集」追巻四、〈禅における空思想の取扱〉五九頁）といっている。

（11）「後心不可得巻」に、「金剛経」の心不可得を評釈し、「またいかなるか過去心不可得といはば、生死去來といふべし、云々」とし、三世心を解明するのに、生死去来の不可得を以てしている。

(12) 青黄赤白これ心なり。長短方圓これ心なり。生死去來これ心なり。(三界唯心巻)

(13) 木村泰賢「大乗佛教思想論」(明治書院発行) 五二〇頁。なお例えば、「心悩故衆生悩、心浄故薬生浄」(「雑阿含経」一〇)(大正二・六九c)「法句経」一雙品二偈。(南伝蔵廿三・十七)等。

(14) 例えば智顗「法華玄義」二上(大正卅三・六九六a)

(15) 此空寂霊知之心、是汝本来面目。(高麗普照禅師修心訣)(大正四八・一〇〇七a)